

# The English Department Newsletter

関東学院大学文学部 英語英米文学科ゼミナール連合通信 第6号 ● 2018年1月18日発行

## 「ゼミナール通信」冒頭挨拶

英語文化学科長 草山 学

### CONTENTS

- ① 学科長挨拶  
English Camp 2017
- ② English Camp (続き)  
英国研修体験記
- ③ 第66回シェイクスピア英語劇  
オープンキャンパス国際文化  
カフェ
- ④ 留学経験学生座談会
- ⑤ 教育実習体験談
- ⑥ 就職活動体験談
- ⑦ 大学院生にインタビュー  
贈る言葉
- ⑧ 卒業論文発表会  
TOEIC-IP試験予告  
Vista

\*2015年度より英語文化学科となりましたが、現4年次生は旧英語英米文学科の所属となる関係から、本紙も旧名を用いています。

日本人は3という数字を好んで使うと言われていました。「三人寄れば文殊の智恵」「早起きは三文の徳」「仏の顔も三度まで」など、確かに日本語の諺にはこの数字がたくさん出てきます。ちなみに、「三人寄れば文殊の智恵」に相当する英語の諺は、“Two heads are better than one (2人の頭は一人の頭より良い).”となり、3人よりも2人で話し合うことに重点が置かれているような印象を受けます。しかし、日本人の中には、2人だけで物事を進めようと、なんだか密談をして勝手に決めていくように感じてしまう人も多いのではないのでしょうか。実際、「第三者の意見が重要」というフレーズを良く耳にしますし、私のゼミでも、学生が主体となって何かを企画する時には、ゼミ長と副ゼミ長が話し合うだけでなく、教員や他のゼミ生の意見を必ず聞いてくれます。たとえば、2人の意見が喰い違い、争うことがあっても、3番目の人が仲裁役や審判役となってくれることもあるのです。このように、物ごとがうまくいくかどうかは、第三者のフォローが重要な役割を果たしていることは言うまでもありません。

さて、3という数字にこだわるとすれば、私たちの学部学科が国際文化学部英語文化学科に名称を変えてから今年で3年目の節目を迎えました。「三つ子の魂百まで」や「石の上にも三年」という諺があるように、何をはじめにも最初の3年が重要です。この3年間、私たちの学科は様々な新しいことにチャレンジしてきました。その1つが、「イングリッシュ・キャンプ」「サービス・ラーニング」「英米文化探求」という3つの異なるタイプからなる国際交流演習という体験型学習の科目を新設したことです。今年度は毎年行われているイングリッシュ・キャンプに加えてイギリス文化探究を実施しました。来年度はハワイでのサービス・ラーニングを企画しています。また、今年度の入試から留学意欲の高い学生を本気でバックアップするために「留学特待生入試」を開始しました。これらの企画には、文学部時代に確立した教養教育を土台しながらも、これまで以上に海外に目を向けもっと外に飛びだして欲しいという私たちの願いが込められています。今年が「飛躍の三年目」となるのか「3年目の壁」に直面してしまうのか、いずれにしても、私たちが困難を乗り越え日々発展していくためには、第三者のフォローが重要となります。学内だけでなく学外に向けても発信される今回のニューズレターが皆さまからのご意見をいただける良い機会となることを大いに期待しています。



3人寄れば文殊の知恵?!  
ゼミ長と副ゼミ長と私の三人の  
写真です。

## English Camp 2017

2017年8月6日～8月8日 神奈川県湯河原

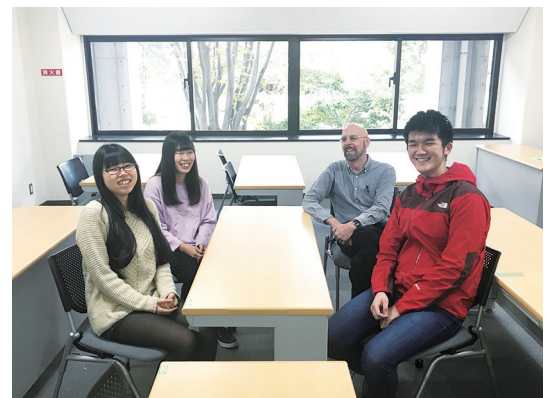
英語文化学科の新しいカリキュラムの1つとして昨年度より始まった English Camp が、今年度も神奈川県湯河原で開催されました。ホテルを貸し切り、ネイティブスピーカーの先生たちとともに3日間、日本語禁止の英語しか使えない環境で過ごすのが、このキャンプの最大の特徴です。今回は今年度の English Camp に参加した1年生の向山 実穂子さんと林 菜々子さんに、キャンプでの体験や思い出をインタビューしました。

### Q. 今年の English Camp はどんなものでしたか？

向山・林：大学の授業と同じく90分の授業でしたが、クラスのメンバーが毎回変わるので、1コマ1コマにそれぞれ違う魅力がありました。また、ホテルの1階から5階まで貸し切って行うため、教室の移動がたいへんでした。授業の合間の短い移動時間に、みんなで階段を駆け足で登り降りしたのは今となってはいい思い出です(笑)。

(次のページにつづく)

今回インタビューに答えてくださった向山 実穂子さん(写真左手前)と林 菜々子さん(左奥)。右側奥が English Camp を担当している McKim 准教授



## 第2回イングリッシュ・キャンプ参加者インタビュー

### Q. 印象深い授業を教えてください。

向山：背中にキャラクターや人の名前などが書かれた紙を貼られ、それを疑問詞を使わずに質問して当てるというゲームが印象深いです。私の背中には「トトロ」と書かれた紙だったのですが、男か女か質問してもみんなNOと言われたので分からず最後まで残ってしまいました。最後に McKim 先生がモノマネでヒントをくれたので何とか正解することができました。

### Q. English Camp を終えて何か変化はありましたか？

林：普段の大学の授業だと机があり、教壇があるので、先生と距離を感じることがありました。でも、English Camp は机のない畳部屋で少人数での授業が行われるので、質問がしやすく、同じ目線で接することができました。そこがとても良かったですね。食事も先生方と一緒に食べますから、まるで友達のような感覚で接することができました。英語を話す上でも自信になりましたね。



### Q. これから English Camp に参加する生徒にメッセージをお願いします。

向山・林：春学期の授業を受けることで English Camp の準備が完璧になり、より良い体験ができるようになります。English Camp と聞いて英語しか話せないということに抵抗があるかもしれませんが、その先に必ず成長があります。そのチャンスを得るためにぜひ参加してみてください。  
(英語英米文学科4年 柚木 拓海)

## 英国研修体験記—おいしかったイギリス料理—

国際文化学部の授業である「国際交流演習」の一環として、2017年9月4日から9月13日までの10日間、私たちは英国での現地研修に参加しました。ロンドン中心部のウエストミンスター地区では歴史に触れ、スコットランドの首都エジンバラではオールド・タウンを見学し、湖水地方ではロマン派の詩人ワーズワスに関連する文化史跡に足を踏み入れ、研修を通じて様々な歴史的建造物を訪れました。

私はその中でも湖水地方で『ピーターラビット』の作者ビアトリクス・ポターの住んでいたヒルトップのコテージを見学したことが印象に残っています。小さい頃から絵本の中で見ていた世界を実際に目の当たりにすると、「感動」の一言では収まらないのだということを身をもって知ったからです。さらに自由行動でロンドンのウエストエンド生まれのミュージカル『オペラ座の怪人』を観に行ったことも貴重な体験でした。劇は当然英語で上演されたのですが、ストーリーはしっかりと理解できましたし、何よりも公演終了後の大歓声！ 本場の劇場の雰囲気を満喫できました。

ところで、「イギリスは料理が美味しくない」と一般にいられていますが、今回、私が現地で食べた料理はどれも、そんな固定観念を覆すほど美味しかったのです。英国研修を通して、私は自分が実際に目で見たり、舌で味を確かめることが大切だということ学びました。「ベスト・オブ・イングランド」を肌で感じる事ができて、私はイギリスが一層好きになりました。

(英語英米文学科4年 平本 彩乃)



2018年度の「国際交流演習」は、今年度実施したイングリッシュ・キャンプに加えて、ハワイでのサービスマニッシュアップを計画しています。詳細は2017年度内に決定され、その後に参加者の募集が行われます。これまでと同様に春学期に現地事情を教室で研究し、夏期休暇期間にハワイでの研修に参加する形となります。

## 第66回シェイクスピア英語劇 The Merchant of Venice

関東学院大学の伝統行事であるシェイクスピア英語劇は今年で66回を迎えました。今年の演目は『ヴェニスの商人』ですが、この作品は、シェイクスピアの書いた37の戯曲の中でも人気の高い喜劇です。私自身も好きな作品だったので、非常に楽しみにして劇場に足を運びました。

上演時間は休憩無しの140分間。その長い時間演じ続ける役者たちの集中力には驚かされました。そして、今回の公演で目を引いたのは、女性が主人公の男性、バサーニオを演じていた点です。劇の初めこそ気になったものの、劇の進行とともに男らしい演技に引き込まれ、全く違和感を持つことはありませんでした。それほど彼女の演技力が高かったのだと思います。

私が一番の見所だと思ったのは、4幕1場のヴェニス法廷の場面です。ユダヤ人シャイロックが証文を盾にアントーニオの胸の肉1ポンドを要求するという、緊迫した裁判のシーンを真に迫る演技で役者たちが熟演してくれました。手に汗を握るようなスリルを感じ、瞬きするのも忘れるほどでした。

シェイクスピア作品の膨大で難解な台詞を英語で覚え、演じるのは一筋縄ではいかないと思います。舞台に出るキャストだけでなく、照明、音響、衣装、小道具などのスタッフの働きも劇を作り上げるうえで非常に大切なものです。関東学院大学シェイクスピア英語劇研究会の役者と裏方のスタッフが長い時間をかけて、努力した結晶がこのシェイクスピア英語劇であると思います。

私は、シェイクスピア英語劇を観たことでその面白さに嵌り、また来年もシェイクスピア英語劇が観たいという気持ちになりました。それ程の影響力がこの劇にはあります。今後も関東学院大学のシェイクスピア英語劇の伝統を守っていつてもらいたと思います。今までシェイクスピア英語劇を観たことが無い人も、次回の公演はぜひ実際に劇場に足を運んでシェイクスピアの世界を体感してみてください。

(英語英米文学科4年 後藤 優介)



## オープンキャンパス 国際文化カフェ

暑さ厳しい7月と8月の末に、今年もオープンキャンパスにて国際文化カフェを開催しました。国際文化カフェとは、オープンキャンパスに訪れる受験生と保護者の方にフリードリンクとお菓子を提供するという企画です。もちろん、単に休憩場所を提供するだけではありません。店員役を務める在学生在が受験生の疑問や質問に答えながら、高校生活とは違う大学生活の楽しさを伝えて、国際文化学部をもっと深く知ってもらうという大きな目的があります。

カフェでは、学科説明会やその他のイベントでは聞くことができない大学生活の具体的な話を聞くことができます。私はゼミの仲間と共に7月のカフェに参加したのですが、カフェのオープンな雰囲気も手伝って、受験生や保護者の方々も気軽に立ち寄ってくださり、大学での授業や留学、受験生当時の体験など様々な質問を受けました。

私個人としては、高校生の不安や質問に実際に向き合ってみて、かつての自分も同じ悩みを抱えていたことを改めて思い出しました。思いがけず自分を振り返り、見つめ直すきっかけにもなったので、参加してよかったと感じました。

(国際文化学部 英語文化学科3年 久保田 怜奈)



## 留学経験学生座談会

本学の留学制度を利用して海外で学んだ3人の学生に、ご自身の留学体験についてお話をうかがいました。

今回の誌上座談会に参加してくれたのは、語学派遣留学を利用してオーストラリアのクイーンズランド大学に留学した4年生の堺優希さんと中村早耶香さん、同じく語学派遣留学でカナダのサスカチュワン大学に留学した3年の廣瀬龍人さんです。

### Q. 留学をしようと思ったきっかけや理由はありますか？

堺：私は従姉妹が留学をして自分も行きたいと思いました。本当はカナダに行きたかったのですが、ゼミの関係もあり、第2希望だったオーストラリアに決めました。

中村：私は留学が大学生活での1つの目標だったからです。また、英語を学ぶためには現地で生活することが1番だと思ったことも理由のひとつです。

廣瀬：私は高校を卒業するときには就職をしようと考えていました。

でも、父と話し合って、大学に進み留学に挑戦するという結果に至りました。それが留学を決めた理由です。

### Q. 留学を通して、自分で変わったと思うことはなんですか？

堺：積極性と英語力がつきました。自分から発言することが多くなり、授業中の発言も増えました。英語力は現地で学ぶだけあって、かなり上がりました。

中村：私の場合、英語力ではスピーキング、ライティング能力が向上しました。また、英語を話すことに対して、自身がつきました！

廣瀬：目標を持ってそれを達成することで、責任感と計画性が培われました。また、留学をしたことで、自ら行動する大切さも学べたと思います。ホームステイを体験することで、自分が何をすべきか、何が最善なのかと考えながら行動をとれるようになったことも、変わった点だと思います。

### Q. 最後の質問です。ぜひ留学をオススメしますか？

堺：オススメです。海外で生活をし、色々な国の人とかかわることで視野が広がり、世の中を広く見ることができるようになりますよ！

中村：留学はオススメです。色んな国の友達と共に勉強することで、英語力だけでなく、各国の文化や言葉をいることができて知識が増えました。学生のうちにしかできない体験だと思います！

廣瀬：留学はとてもオススメです。特に長期留学ですね。私は留学するまでに貯金したお金の全額を使いました。そのことも「留学を無駄にできない」というモチベーションにつながりました。



クイーンズランド大学 (オーストラリア)



サスカチュワン大学 (カナダ)

今回記事をまとめた細野もリンフィールド大学に交換留学をしました。日本とは異なる文化に囲まれて生活し、学んだ経験は、様々な面で自分のプラスとなっています。英語を(英語で)勉強するために外国に行くのですから、英語力に自信がなくてもあまり問題ないと思います。大学生の間はたくさん時間があります。ぜひ自分の世界を広げるためにも留学をしてみてください！

(英語英米文学科4年 細野 実波)

# 教育実習体験談

今年度教育実習を体験し、教職の免許を取得した4人の4年次生が教壇に立った経験を語り合いました。

今回集まったメンバーのうちで、小林陽太さんと安達汐里さんは中学校で、進行役を務めた百瀬智哉と寺田玲唯は高校でそれぞれ3週間の実習を行いました。



## Q. 教育実習に行ってみていかがでしたか？

寺田：毎日何かしらの課題にぶつかることがあり、その解決策を探るのは大変でした。でも、生徒とのふれあいがいい息抜きになりました。

小林：規則正しい生活に慣れるのが大変なので、実習前には規則正しい生活リズムに慣れておくことが大切だと感じました。

安達：授業を行い、生徒との距離が縮まって行くにつれて、先生として教壇に立つ喜びを味わいました。

百瀬：はじめは生活スタイルに慣れなくて苦労しましたが、慣れてくると毎日生徒の顔を見るのが楽しみになっていきました。先生ってそういうものなのかなと思います。

## Q. 授業以外で心掛けたことは？

寺田：生徒への挨拶などを心がけ、生徒との時間を最優先にしていました。

小林：教材研究や事務的作業は放課後に残し、極力生徒と過ごす時間を大切にしました。

安達：自分からコミュニケーションを取りに行くことを意識し、先生にはアドバイスを求め、生徒とは交流を深めていました。

百瀬：高校生は好奇心旺盛なので待たなくてもあちらからグイグイきてくれていてやりやすかったです。心がけていたことは、あまり仲良くなりすぎないことです。

## Q. 具体的な授業準備や授業中の工夫は何をしましたか？

寺田：コミュニケーション中心の授業にするために、板書時間を減らす工夫としてマグネット・カードを使いました。

小林：教壇に立つと指導案通りできませんし、生徒の反応を伺う余裕もありません。模擬授業をしっかりやっておく必要があります。

安達：担当の先生の授業をモデルに行うので、授業の組み立て方を見習うことが大切であると感じました。

百瀬：自分が受ける側として「この先生面白い」「わかりやすい」と思えるように気遣いながらやりました。

## Q. これから教育実習へ行く後輩へのメッセージをお願いします。

寺田：母校での実習になる方が大半だと思いますが、卒業生としてではなく、あくまでも実習生としての意識をしっかりと持ってください。

小林：実習期間までに、できることはたくさんあると思います。

普段の模擬授業から生徒の反応を想定し、具体的な指導案を作ることを心がけましょう。

安達：授業では予測不可能なことが多いので、大変です。様々な事態を想定し、対応できる「引き出し」を用意しておきましょう。

百瀬：睡眠時間が取れないと言いますが、それは準備が足りず甘えた自分の責任です。準備ができていれば大丈夫なので、それを怠ることなく頑張ってください。



(英語英米文学科4年 寺田 玲唯・百瀬 智哉)

## 就職活動体験談

今年も前年同様、4年次生3名の方からそれぞれどのように就職活動を行ってきたのかをインタビューしました。

### 日産プリンス神奈川販売株式会社に内定…中村美月さん



私は人と接する仕事をしたいと思い、就職活動を行っていました。活動前は、就職支援センターに通い、自己分析や履歴書の書き方の指導をしていただきました。また、マナーや面接練習の講座にも参加し、活動に向けて準備をしました。最初は何をしたいかがわからず、多くの業種の説明会に参加し、企業研究をしました。自動車ディーラーに興味を持ち始めたきっかけは、お客様のために働くことができるやりがいのある仕事だと感じたからです。お会いした社員の方々の人柄の良さや、社風が自分に合うと感じたことも入社決め手となりました。活動中は、なかなか内定が貰えず、不安で悩むこともありましたが、今では自分が納得いく活動ができて良かったと思っています。就職活動をする上で自己分析をしっかりし、軸を決めておくといいでしょう。最終的には自分が納得いくまで活動することが大切です。適度に息抜きしながら頑張ってください！

### CKTS 株式会社（旧キャセイ関西ターミナルサービス）に内定…川原愛菜さん



私は中学生の頃から英語を使った仕事がしたいと思っていました。そして世界各国の人々が行き交う空港という活気ある場所で働くことがいつしか私の夢になりました。そのためにはまず英語力や異文化理解が必要だと考え、アメリカに留学をし、TOEICなどの勉強に励みました。また、自分の力だけでは不安だったためエアラインスクールに通い、専門的な知識や所作を学びました。実際にグランドスタッフとして活躍する友人や先輩から、よりリアルな話を聞くことはモチベーションアップにつながりました。

航空業界だけでなく他の業種も沢山受けましたが、面接に慣れたことで、数社から内定をいただくことができました。私は主に接客業を受けていました。その中で感じたことは、身だしなみや言葉遣い、第一印象がとても大切だということです。何より重要なのは、緊張しても必ず笑顔だけは忘れないこと。ストレスも溜まることもありますが、上手に気分転換をして頑張ってください！

### 学習院大学人文科学研究科 英語英米文学専攻に進学予定…本間弘希さん



英文法ならば時間を忘れて没頭できる。これが在学中に身につけられて良かった点のうちの1つです。大学院へ進学した理由も文法に関係があります。近頃ではGoogle翻訳における翻訳精度も徐々に上がりつつあり、レストランのメニューや申込書レベルの文書では十分事足りるようになりつつあります。けれども、自動翻訳の限界も見え隠れするようになってきました。たとえば、英語における better という単語には形容詞 good と副詞 well の2つの可能性があります。見かけは同じ形なので他の文中要素との兼ね合いの中でしか品詞と意味が決定できません。Google翻訳では意味を1つしか表示できないので、そのような場合1/2の確率で常におかしな翻訳結果を表示することになります。しかしながら、翻訳を行うのがヒトであれば他の文中要素との関係性から適切な品詞と意味を正確に捉え正しく翻訳することができます。ヒトが持つ文法能力の可能性や文法を基盤とした言語習得の解明、さらにはAIとヒトの言語処理過程に興味があったので進学の道を選びました。

#### 2018年卒業・修了予定者対象 就職支援行事（情報提供：金沢文庫キャンパス就職支援センター）

①就活直前ガイダンス & KGU データバンク配布会（※学内合同企業説明会参加企業 600社の情報を収録）

1月16日（火）、18日（木）、19日（金）12:30-13:00 K-311 教室

②学内企業説明会

3月1日、2日、3日、5日、8日、9日、12日、13日、15日、16日、19日、20日  
12:30～16:30 金沢八景キャンパス

## 大学院生にインタビュー

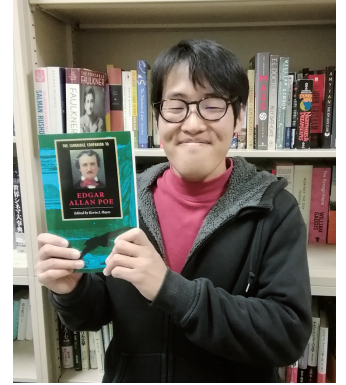
今年度より文学研究科英語英米文学専攻博士前期課程 1 年に在籍中の須藤周作さんにインタビューしました。

### Q. 大学院に行こうと思った動機は何ですか？

最初は進学のもつもりは無かったのですが、四年の終わり頃になって、納得のいかない形で卒業論文を提出してしまったことに後悔し、また卒論で扱った内容以外にも勉強してみたいことがあると感じ始めました。そこで内部進学して納得のいく研究をしようと決心しました。このため決めた時期が12月と遅く、2月の一般入試まで期間が短くて苦労しました。

### Q. 大学生活はどのように過ごしましたか？

特に変わった生活はしていませんでしたが、講義は興味のあるアメリカ文学系の授業を一年次の時から多くとっていました。特に本村教授からはゼミナールや講義などでたくさんご指導いただいたので、かなり有意義な大学生活を送られたと思っています。また学問以外の活動としては、所属していた大好きなフォークソング部には特に力を注いで挑みました。この部活動を通して得た他学部の友人たちとの交流は、僕自身の人としての成長のみならず、専攻学科以外の様々な分野での知識を深めてくれたと感じています。



### Q. 学部生へのメッセージをお願いします！

突然ではありますが、皆さんは「勉強」と「学問」の違いは何だと考えていますか？僕は「強いて勉める」ものが「勉強」で、「学び問う」ものが「学問」であると思っています。すなわち、勉強は外から強いられるもので、反対に学問は自ら学び問う、あるいは問うて学ぶものであると考えます。僕は学問をするにあたって、大学以上にすばらしい環境が整っている所はないと思います。是非皆さんも学問に部活やサークル活動、私生活もすべて含めた自分だけの大学生活を後悔の無いように送ってください。また大学院の授業は学部よりも専門性が高いので、卒業までの4年間では学び足りないと考えの方は進学を視野に入れるといいでしょう。

(英語英米文学科4年 大谷 圭太)

## 贈る言葉

2017年度をもって退職される3人の先生方からメッセージをいただきました。

### 仙葉 豊 教授

ちょうど還暦のときに、大阪からこちらにやってきました。早いものでもう10年がたってしまいました。びっくりです。こちらでは楽しい思い出ばかりで、退職したら大阪に戻りますけれど、夢に出てきそうです。門に入ってすぐの芝生と運動場は、見ているだけで気持ちよくなりますし、前の大学はコンクリートの建物ばかりだったので、本当に緑のキャンパスというイメージでした。夜はよくゼミの皆と文庫のあたりでのみしました。昔の学生さんたちは、名前は忘れてしまいますのですが(すみません)、顔は不思議と覚えています。いつか元気だったら また文庫あたりで飲みたいですね。ありがとうございます。



### 多ヶ谷 有子 教授

文学部教師として関東学院に参りまして36年が過ぎ、来春文学部最後の学生達と共に関東学院を卒業することになりました。この36年間の間に世の中も大きく変わりました。今、基本的に変わらなかったのは関東学院の学生達の気風かなと思います。おおらかに身の丈で生きるこの気風を、私は心から誇りに思い、関東学院で過ごした日々をありがたく思います。これからの関東学院の学生たちの幸あれと祈りつつお別れをいたします。



### 西原 克政 教授

関東学院大学で30年間在籍させてもらいました。最初の年はまだ六浦キャンパスにあった文学部に1年間所属して、翌年から今年で29年間釜利谷キャンパスにいたこととなります。少なからず変遷と進展を遂げた釜利谷キャンパスで、約30年勤められたことを今は幸せに感じております。今後は郷里の岡山に戻ってのんびりと過ごすつもりです。みなさまのご健康とご活躍をお祈りしております。





## 2017 年度 英語英米文学科 卒業論文発表会

今年度も英語英米文学科に提出された卒業論文の発表会を以下の日程で開催します。ゼミナールで学んできた内容を卒業論文という形でまとめ、各ゼミナールの代表が発表するイベントです。同級生である4年生、来年、卒業論文を執筆予定の3年生はもちろん、“卒論ってどんなものだろう？”と思っている1、2年生も気軽にご参加ください。もちろん他学科の皆さんや先生方も大歓迎です。なお、今回から最優秀発表者を選考し、表彰を行うことが決定しました。ぜひ発表を聞きに足を運んでいただきたいと思っています。

(英語英米文学科4年 下園 大翔)

日時：2018年2月6日(火) 13:30 から  
場所：K-123 教室 (予定)



同日  
開催

英語英米文学科生対象  
**TOEIC-IP テスト  
実施のお知らせ**

実施日：2018年2月6日(火)  
時間：9:20～12:00(予定)  
場所：K-310、311 教室  
受験費用：無料(2・3年生対象)

### 英語英米文学科ゼミナール連合会

## Vista No.6

▼ゼミナール通信第6号をお届けします。今回ゼミナール通信の製作を担当した4年生が英語英米文学科の最後の学年です。今回は国際交流の記事が多くなりましたが、紙面に載っている記事の1つひとつを見てみると、英語文化学科への名称変更後の新しい取り組みや新しいカリキュラムが年々増えていることがわかります。関東学院大学の魅力がさらに増したのではないかと感じています。

▼現在の英語文化学科は大学での学びはもちろん、英国研修やお昼休みに開催される English Lunch、そして English Camp など国際交流や英語学習をするためのチャンスがとて多く設けられています。また、2018年度から留学特待生入試が始まることにより、さらにそのようなチャンスが増えていくと思います。在学生はこれらのチャンスを余すことなく利用してください。

▼記事は委員一人ひとりが実際に取材をしてまとめたものです。国際交流に興味をお持ちの方はもちろん、これから就職活動を行われる学生の皆さんもぜひ参考になさってください。また、特別に今年度で退職される教員の方々からもお言葉をお寄せいただきました。授業やゼミ等でお世話になった恩師の先生方のメッセージが皆さんに届くことを願っています。

▼最後に発行にあたりご指導、ご協力をいただいた安藤先生、兎玉先生にはこの場を借りてお礼申し上げます。

(英語英米文学科4年 柚木 拓海・下園 大翔)

The English Department Newsletter Vol.6 (英語英米文学科ゼミナール通信第6号) 2018年1月18日発行

編集：関東学院大学文学部英語英米文学科

編集協力：関東学院大学文学部英語英米文学科ゼミナール連合会

〒236-8502 横浜市金沢区釜利谷 3-22-1 TEL. 045(786)7179 URL : <http://www.univ.kanto-gakuin.ac.jp>

印刷所：株式会社なまためプリント 〒231-0006 横浜市中区南仲通 4-43 馬車道天津ビル TEL. 045(641)8080